

平成 30 年 4 月 9 日

公益財団法人
船井情報科学振興財団御中

シカゴ大学経済学研究科
潮田佑

2012 年度派遣奨学生第 9 回報告書

未だに寒さの厳しいシカゴですが、大学は春学期を迎えています。私自身の生活にも少しの変化がありましたので、ご報告させていただきます。

1. シカゴ大学経済学部の変化

やがて一流の経済学者となる学生でも落第したり、奨学金の給付が渋いことで知られていたシカゴ大学の経済学部ですが、ここ数年で博士課程の学生への待遇は大きく改善されているようです。

もっとも大きな変化はコースワークでしょう。過去には半数以上の者が落第し、大変厳しいことで知られていましたが、年々試験の合格率が上昇していることは過去の報告書でも記した通りです。それが昨年度はついに一人も落第する学生が出なかったようです。正確には 21 人が 3 科目の試験を受け、合格率は 62/63 であったというようです。合格できなかった科目が一科目の場合、その学生は進級してその科目のみ再履修することができるので、留年ならびに退学となった学生はこの学年に関してはいなかったことになります。

また、財政状況も改善されているようです。アメリカでも有数のファンド・マネージャーであるケネス・グリフィン氏より 1 億 2500 万ドルの寄付を受け、経済学部の名称自体も「Kenneth C. Griffin Department of Economics」という名称に変更されました。これまでメディカル・スクールやビジネス・スクールに巨額の寄付を行った億万長者の名前が付さ

れることはよくありましたが、社会科学の一学部としては極めて珍しいケースなのではないでしょうか。これにともない、来年度から入学する学生の奨学金の額はかなり増額されることになるようです。

また、学生に対する研究へのサポートが乏しいのではないかと声を受け、数年前からアドミッション・オフィスが中心となって大学院プログラムの改革をはじめているようです。具体的には一学年あたりの人数をしばり、研究の進捗状況をより細かくチェックした上で、セミナーやワークショップにおける学生の研究発表をより積極的に行わせることにしたようです。



キャンパスの経済学部棟が比較的新しいこと、ビジネス・スクールの教授陣とコミュニケーションを取ることが極めて容易であることを勘案すると、シカゴ大学の経済学部はかなり進学先としておすすめできると思います。私が入学した頃であれば、同じくらいのランキングの大学とくらべて見劣りのする面がいくつかあったことは事実ですが、近年はむしろ大学院生のためのプログラムとして過小評価されていることのほうが多いのではないかと考えています。

2. 博士論文

しばらく前に、ようやく博士論文にふさわしい結果を出すことができそうなトピックを思いつきました。予備的な分析を終え、現在はモデルを構築している段階です。小売業者の価格戦略とそれに対する消費者行動に関する研究なのですが、うまく因果関係を抽出するために、日本の税制改正に注目しています。この税制改正前後の小売データをうまく活かすことによって意味のある結果を残したいと考えています。

今回はマーケティング調査を行っている日本の会社が収集しているデータを使わせてもらうことができました。いくつかの似たデータ保有先にコンタクトを取ってみたのですが、データを提供してくれた企業のように、アカデミアに理解のある会社もあれば、けんもほろろな対応をする会社もありました。データの入手に限らず、アカデミアの人間が産業界

に協力をお願いする場合には、あきらめずに数を打つことが大事なのだと学ぶことができたように思います。

3. 就職活動

最近は就職活動も始めています。これを記している時点で民間企業のインタビューを控えているので、それに向けての練習に取り組んでいます。日本の就職活動と同じように、面接で聞かれることはある程度定型化されているようなので、想定問答集を作成しておくことが大切なようです。

また、採用者は多くの面接をするコストが無駄にならないよう、本当にその企業への入社を志望しているのかかなり気にするようです。そのために「なぜ同業他社ではなく我が社なのか」といった質問にスラスラと答えることが重要のようですし、ウェブサイトや実際にその企業で働く従業員からの話で事前に情報を収集しておくことが肝心のようです。



以上ご報告とさせていただきます。末筆ではございますが、このような機会をいただいたことを改めて感謝し、今後とも勉学・研究に励む所存です。向寒のみぎり、財団関係者の皆様もお体に気をつけてお過ごしください。